

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02471

研究課題名（和文）保育における幼児の音遊びとその援助：環境との関わりと人間関係に注目して

研究課題名（英文）Sound play in young children and its support in childcare: Focusing on the relationship with the environment and human relationships

研究代表者

松阪 崇久（MATSUSAKA, Takahisa）

関西学院大学・教育学部・准教授

研究者番号：90444992

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、保育者養成課程における乳幼児の音遊びの扱われ方について、総合的指導の観点から明らかにすることであった。まず、チンパンジーとの比較からヒトの遊びの特徴を整理し、ヒトの音遊びに注目するには領域「人間関係」と領域「環境」の視点が重要となることを明らかにした。次に、保育における遊びの捉え方に関する幼稚園教育要領などの理念と実態の間に乖離があることを確認し、その改善策について考察した。また、保育において重要な概念とされている「環境」の解釈に混乱がみられることを指摘し、その要因と改善策について考察した。これらを踏まえ、保育系学会における音遊びの扱われ方について分析をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、保育における音楽表現をより豊かなものとすることを目的としている。保育現場では保育者のピアノに導かれた一斉歌唱や鼓笛隊の演奏がしばしばみられる一方で、自由な音遊びの実施例は少ないという問題意識が研究の発端であった。音楽表現は領域「表現」や小学校の教科「音楽」と関連するものと捉えられがちだが、ヒトの音楽表現に独自の豊かさは領域「環境」や領域「人間関係」に注目した音遊びの展開によって広がることを指摘した。また、保育における「遊び」の捉え方や「環境」概念の理解に課題があることを指摘し、その改善策について考察した。本研究により、画一的ではない豊かな音楽表現への理解が進むことが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify how sound play of young children is treated in child caregiver training programs from the perspective of "comprehensive instruction". First, (1) I pointed out the characteristics of human play by comparing with chimpanzees, and clarified that the perspectives of the domain "human relations" and the domain "environment" are important when focusing on human sound play. Next, (2) I confirmed that there is a discrepancy between the actual situation and the philosophy of the Guideline for Kindergarten Education regarding how to perceive play in childcare, and discussed how to improve this discrepancy. I also pointed out that (3) there is confusion in the interpretation of "environment," which is considered an important concept in childcare, and discussed the causes and improvement measures. Based on the above, I analyzed (4) how sound play is treated in academic societies of childcare.

研究分野：保育学

キーワード：音遊び 領域「環境」 保育 幼児教育 表現 環境を通して行う教育 総合的指導 主体性

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の幼児教育・保育では、子どもの主体性を尊重することが重要視されており、「環境を通じた保育」が指導法の理念として掲げられている。しかし、実際の保育現場では、保育者主導の設定活動を中心とした指導(保育者のピアノ伴奏による一斉歌唱や鼓笛隊の演奏)がおこなわれている場合も少なくない。本研究計画は、こういった指導の在り方を完全に否定するものではないが、保育における音楽的な活動が偏ったものになっているのではないかと、自由な音遊びの援助が保育現場で軽視されているのではないかとという問題意識が研究の発端となっている。

保育現場の音楽的活動の偏りは、保育者養成課程における音楽関連の授業内容の偏りにもつながっているようである。ピアノを用いた音楽的活動の指導技術を習得することが養成課程において必須とされ、カリキュラムのかなり多くの時間がそのために割かれている例がある。養成課程における音楽教育の在り方についても再考する必要があるのではないかとという問題意識も、本研究をおこなった動機の一つである。

このような偏りに対して、いくつかの研究が幼児にとっての音環境や幼児と環境の関わりに注目し、保育現場の音楽的活動を別の視点から見ることを促がしている。たとえば、吉永(2014)は、身の周りの音や場の音の響き方の違い、環境との関わりの中での音の変化などを感じることが、幼児の感性を育むことにつながるとしている。本研究計画は、近年になって増えつつあるこのような学術の流れをさらに進めようとするものである。つまり、幼児自身の興味・関心に基づく探索的な音遊びや、音を用いた自由なコミュニケーションの意義を示すことにより、音遊びが持つ幅広い価値の認識につなげたいと考えた。

研究代表者は、科研費・若手研究(B)「野生チンパンジーの遊びの多様性と環境」(平成27~29年)により、チンパンジーの乳幼児が身の周りの環境に関心を持って働きかけることで、音遊びを含む多様な遊びを経験していることを報告した。本研究は、この成果の発展を目指すものでもあった。先の研究計画では主にチンパンジーの遊びを観察し、それとの比較からヒトの特徴について考察したが、本研究では保育におけるヒト幼児の音遊びに注目し、保育における音遊びの体験の意義とその援助のあり方について考察することとした。

吉永早苗 2014「幼児の音感受の状況と音感受教育の提言」『子ども学・第2号』萌文書林

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育における音遊びについて、その活動内容や保育者の援助はどうあるべきかを明らかにすることである。従来からなされてきたピアノを用いた一斉歌唱や鼓笛隊の練習といった活動以外にも、子どもの音楽的な育ちにとって重要な音楽的体験があることを示すことを目指した。その際、領域・表現だけでなく、領域・環境および領域・人間関係の視点からの分析をおこない、音楽的活動において見逃されがちな意義に注目する。また、音遊びにおける幼児の体験をより深めるための援助を考えることにより、保育における音楽的活動とその援助の幅を広げるためにはどうすれば良いかを考察する。

当初の予定では、保育現場での実地調査によってデータを収集し、保育における音遊びと保育者による援助の実態も調べることにしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響の長期化により調査を実施することができなかった。そのため、当初の計画を変更し、保育者養成課程における音遊びの扱われ方とその援助、及び、総合的指導の捉えられ方を明らかにすることを目標とした。

研究を始めるにあたり、まず「遊び」とはどのようなものか、ヒトの遊びの特徴は何かという根源的な問いについての考察をおこなった。また、研究を進めるベースとして、保育において遊びはどのように捉えられているかを保育のガイドラインから読み解き、実態と比較する作業も必要となった。さらに、研究を進める中で、保育において重要な概念とされている「環境」や「主体性」といった用語について意味の混乱がみられることがわかったため、これらの用語の混乱の要因と対処法についての考察もおこなうこととした。これらの成果を踏まえた上で、保育者養成課程における音遊びの扱われ方についての分析をおこなっている。

3. 研究の方法

上記の ~ について、それぞれの研究方法を以下に説明する。

まず、「遊び」とはどのようなものか、ヒトの遊びの特徴は何かという問題については、ヒトとチンパンジーの行動比較についての研究の蓄積と、報告者自身のこれまでのヒト及び野生チンパンジーを対象とした観察を基に考察した。

保育において遊びがどのように捉えられているかについては、国から示されている保育のガイドラインである幼稚園教育要領と保育所保育指針の記述の分析をおこない、現実に見られる保育活動との比較をおこなった。

保育における「環境」や「主体性」といった用語の意味の混乱については、保育関連の文献研究によって現状の把握と対処法の考察をおこなった。

保育者養成課程における音遊びの扱われ方については、保育系学会の学会発表を対象として分析をおこなっている。表現活動に関する発表の内容分析をおこない、さらに「領域間連携」や「総合表現」の事例に注目した分析をおこなっている。これらの分析により、音遊びを含む表現活動についてどのように捉えられているか、また、表現あそびの「総合的指導」がどのように捉えられているかを調べている。

4. 研究成果

1) 遊びにみられるヒトの特徴：チンパンジーとの比較から

「遊び」を定義して「遊び」とそれ以外を厳密に区別することは、しばしば難しい。保育における「遊び」も同様で、保育者主導の一斉活動を「遊び」と称しておこなうことの是非といった、非常に難しい課題を含む問題でもある。本研究では、暫定的に「楽しさやおもしろさが誘因となって自発的に行われる行動」と定義しておく。

ヒトはなぜ遊ぶのかという問いについては、近接要因、究極要因、発達過程、進化史という4つの視点から考えることができるが、とくに近接要因と究極要因に注目して考察をおこなった。まず、近接要因(遊びはなぜ楽しいのか)については、さまざまな要素が楽しさの要因として考えられているが、とくに「偶然性・未知性」の要素はすべての遊びに含まれる重要なものであることを論じた。幼い乳幼児にとっては、周りの環境との関わりで起こることの多くが「未知」であり、それゆえに環境に対する探索的な関わりが楽しい遊びとなりやすい。また、遊びの究極要因、つまり、遊びの楽しさがなぜ進化したのかに関しては、遊びがさまざまなスキルの発達や学びにつながるという機能をもつことを論じた。遊びを通した育ちの多様性は、保育においては5つの領域で整理されているが、それぞれの育ち・学びは乳幼児に備わった好奇心や興味・関心による主体的な遊びによって自発的に経験され得るものだと考えられる。

遊びがさまざまな育ちや学びにつながることは、ヒト以外の動物にもみられる共通の特徴である。ヒトの遊びの特徴は、チンパンジーの遊びとの比較からみえてくる。チンパンジーの遊びにおいても、好奇心に基づく環境との探索的な関わりが多様な遊びを生むことは共通していたが、共同注意や三項関係などの「関心の共有」や、「教育」的な関わりは、ヒトに独自のものだと考えられる。一方、子どもの遊びに対する大人・保育者の「教育」的な関わり方には様々なパターンがある。子ども自身が遊びを通して育つ・学ぶ力を進化的に備えた存在であることをふまれば、大人が意図した遊びを子どもに押し付けて「やらせる」のではなく、子ども自身が興味をもって世界を探索する遊びを豊かに展開できるように支えることがより重要だと考えられる。

以上の内容は、『ワークで学ぶ発達と教育の心理学』(竹尾和子・井藤元 編/ナカニシヤ出版)の「第9章 ヒトの子どもはなぜ遊ぶ? : 遊びの進化と大人の役割」として発表した。

2) 保育における遊びの捉えられ方

一般社会では、遊びはしばしばネガティブなものとして扱われるが、日本の保育においては遊びを通して乳幼児の育ちが重視されている。たとえば、幼稚園教育要領では、子どもに知識を教え込んだり、保育者主導の活動に参加させたりするのではなく、子どもが自分の興味や好奇心から主体的に遊びに熱中し発展させられる環境を保育者が整えること、つまり「環境を通して行う教育」が保育の基本だと書かれている。また、遊びは子どもの様々な側面の育ちと関わることをふまえて、「遊びを中心とした総合的指導」をおこなうこととされている。遊びを通して子どもの育ちの多様性は5つの「領域」に整理されているが、それらを小学校の時間割のように区切って指導するのではなく、すべての遊びに5つの領域の育ちが含まれることを考慮して「総合的」に指導することとなっている。

このように、日本の保育の公的ガイドラインでは、子どもの主体的な遊びが大事にされているといえるが、実際に保育現場でおこなわれている教育との乖離がみられる部分もある。たとえば、子どもの主体性を尊重しているとはいえないような一斉活動(鼓笛隊や詩の暗誦など)も多くみられることや、小学校教育の先取りをする形での「早期教育」が行なわれる例が少ないことである。また、一斉の活動が多いために自由遊びの時間がほとんど取られていない場合や、自由遊びの時間に多様な遊びが展開し得る豊かな環境が整えられていない場合もある。日本の保育は1989年に大きな方針転換をおこない、保育者主導の保育から子どもの主体性を尊重した「環境を通して行う教育」を基本とするように変わったが、それから30年以上たっても旧来の保育がおこなわれている実態がある。

また、子どもの権利の観点からも、いくつかの課題がみえてくる。たとえば、とくに一斉活動において子どもの意見が聴かれることが少ないことや、一日の過ごし方を子ども自身が選ぶことができない場合が多いことなどが課題として挙げられる。さらに、日本の保育の公的ガイドラインにおける「子どもの権利」に関する記述を分析したところ、幼稚園教育要領には、子どもの権利に関する記述が少ないことがわかった。

以上のような現状の課題を整理した上で、どのようにその改善を図るかを考察した。たとえば、早期教育に関しては、保護者からの要求によって実施されている例も多いことが推測される。保育・幼児教育における主体的な遊びや試行錯誤・失敗の体験の意義や早期教育の弊害について、

保護者の理解を広めることや、遊びを通した育ちの理解のためのドキュメンテーションの普及にさらに力を入れる必要がある。

以上の内容は、スコットランドで開催された IPA (international Play Association) 世界大会にて発表した。現在、英語論文を執筆中である。

3) 保育における「環境」概念の混乱の現状と解消法

保育における援助を考える際に重要となる「環境」や「環境を通して行う教育」といった概念について、その使用法を確認したところ、意味の混乱がみられる例が散見された。とくに、5領域の一つである領域「環境」と、保育の基本とされる「環境を通して行う教育」が混同される例がみられた。また、これらと「環境教育」との混同もみられた。

このように、保育において「環境」という語が複数の異なる概念で使用されていることが、混乱を生む一因だと考えられる。これらの概念は次元も視点も異なるものであるが、同じ「環境」という語を含むために区別が曖昧になってしまうようである。領域「環境」については、別の名称を検討した方が良いかもしれない。また、乳幼児をとりまく「保育の環境」には多様な要素が含まれていることと、それらが複数領域に関わる経験を構成していることも、概念理解を複雑なものにする一因となっていると考えられる。

さらに、「環境を通して行う教育」という考え方自体の理解の難しさも関連していると考えられる。「環境を通して行う教育」は、「教育」という語から通常イメージする直接的指導とは異なるものであるため、理解が定着するのに時間がかかる場合があるのだと思われる。

また、「環境を通して行う教育」には、保育者が意図して準備した「環境」と子どもが関心をもって関わった「環境」の間にズレが生じる場合があるという難しさもある。つまり、保育者が意図をこめた「環境」には子どもが興味をもたない場合もあるし、保育者の意図とは異なる関わり方をすることもあるだろう。さらに、保育者が意図しなかった環境の要素に子どもが興味を惹かれて遊びが発展する場合もある。

「環境を通して行う教育」と領域「環境」の間の混乱を避けるためには、以下のように区別しておく必要があると考える。まず、「環境を通して行う教育」における「環境」は、「保育者の教育的意図が加わった環境」であるが、そこには保育者が意図しない環境要素も含まれるものだと考える必要がある。その意味で「子どもを取り巻くすべて」なのだといえる。一方、領域「環境」は子どもの育ちの多様な側面を5つに整理した5領域の一つである。領域「環境」において扱う環境は、子どもが実際に関わって意味をもつようになった環境要素のうち、領域「環境」の内容に示された子どもの経験とつながりのあるものだということになる。

以上の考察の一部は、日本保育学会にて「保育における『環境』概念の混乱を解きほぐす：『環境を通して行う保育』と領域『環境』に注目して」と題して発表した。その後、領域「環境」の教科書を対象として、保育者養成課程における「環境」概念の捉えられ方についての分析も進めており、現在、国内誌に投稿するべく論文を執筆中である。

4) 保育者養成課程における音遊び・表現活動の捉えられ方：保育系学会の発表の分析

保育者養成課程における音遊びを含む表現活動の扱われ方について、保育系学会の学会発表を対象とした分析をおこなっている。

保育系学会として、日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本保育者養成教育学会の3つを対象として、その学会発表の中から表現活動に関するものをひろいあげて内容分析をおこなっている。また、とくに「領域間連携」や「総合表現」の事例を集めた分析もおこなっている。これらに関しては現在分析中であるが、年次変化と学会による傾向の違い、発表者の属性による傾向の違いについて明らかにする予定である。年次変化に関しては、保育者養成課程の改編がおこなわれた2017年前後で変化がみられるかどうかにも注目する。また、「領域間連携」や「総合表現」の事例に関する分析によって、音遊びを含む表現活動において「総合的指導」がどのように捉えられているかを明らかにしようと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松阪崇久
2. 発表標題 日本の保育における「遊び」の課題：子どもの権利の観点から
3. 学会等名 IPA日本支部研究集会「PLAY！2022」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MATSUSAKA Takahisa
2. 発表標題 Characteristics and issues of play in early childhood education and care in Japan
3. 学会等名 The 22nd International Play Association Triennial World Conference（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松阪崇久
2. 発表標題 保育における「環境」概念の混乱を解きほぐす：「環境を通して行う保育」と領域「環境」に注目して
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松阪崇久
2. 発表標題 表現活動の楽しさの根源と多層性：領域・環境とのつながりに注目して
3. 学会等名 全国保育士養成セミナー（第7分科会「新指針を踏まえて知識・実践力を身につける（保育表現の展開）」・話題提供）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松阪崇久
2. 発表標題 表現活動の総合的指導に関する研究：領域・環境の視点に注目して
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松阪崇久	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 16
3. 書名 「ヒトの子どもはなぜ遊ぶ? : 遊びの進化と大人の役割」『ワークで学ぶ発達と教育の心理学』(竹尾和子・井藤元 編)	

1. 著者名 松阪崇久	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 10
3. 書名 第12章「感情の発達がなぜ注目されているのか? : 社会性や認知発達を支える感情」『あなたと生きる発達心理学』(藤崎亜由子・羽野ゆつ子・渋谷郁子・網谷綾香 編)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------